



**Data**

監督：ホ・ジノ  
 製作：チャン・ウェイミン  
 脚本：ゲリン・ヤン  
 原作：ピエール・ショデルロ・ド・ラクロ『危険な関係』（角川文庫刊）  
 出演：章子怡（チャン・ツイイー）  
 /張東健（チャン・ドンゴン）  
 /張柏芝（セシリア・チャン）  
 /竇驍（ショーン・ドウ）/  
 廬燕（リサ・ルー）/王奕瑾（キャンディ・ワン）

## 👁️👁️ みどころ

「あの女を落したら、私を差し上げるワ」。そんな明らかに公序良俗に反する不倫恋愛ゲームは、フランス革命当時のパリのみならず、日中戦争直前の魔都・上海でも・・・？韓国版の『スキャンダル』（03年）に続いて、本作はフランスの作家ラクロの『危険な関係』の上海版だが、嵌める女、嵌められる女は誰が？それがセシリア・チャンとチャン・ツイイーと聞けば、そりゃ必見！

『風と共に去りぬ』（39年）のレット・バトラーを彷彿させる、口ひげとオールバックのプレイボーイ役は韓国のチャン・ドンゴンだが、このために覚えた中国語は女を口説くのに十分なほど流暢だ。「押さば引け、引かば押せ」のテクニックと、契約の履行が終了した後の意外な展開に注目！

「日本版」の登場が待たれるが、その実現はいつ？そして、そのキャスティングは・・・？



## ■□■舞台は18世紀のパリから1831年の上海へ■□■

フランスの作家ピエール・ショデルロ・ド・ラクロ（1741～1803年）が1782年に出版した書簡体の恋愛心理小説である『危険な関係』はこれまでくり返し映画化されてきたが、その舞台は18世紀後半のパリ。その当時のフランスの貴族社会が腐りきっていたことは、1789年にフランス革命が起きたことをみれば明らかだが、道徳的に退廃し、爛熟した貴族文化には不倫やスキャンダルといった人間の本能を刺激する要素があることも確実。そこで、韓国人監督ホ・ジノは、同じテーマの映画の舞台を、1931年の上海に設定した。

1931年と言えば満州事変の端緒となる9月18日の「柳条湖事件」が発生した年で、

日本が中国（東北部）への進出を本格化し始めた年。「東洋の魔都」と呼ばれた当時の上海には、西洋列強の租界が設定され、中国人民はその圧迫に苦しんでいたが、一部の富裕層達は・・・？日中戦争直前の上海を舞台にした映画には、『上海の伯爵夫人』（05年）（『シネマルーム17』214頁参照）、『パープル・バタフライ』（03年）（『シネマルーム17』220頁参照）、『ラスト、コーション』（07年）（『シネマルーム17』226頁参照）等々魅力的な作品が多いが、ホ・ジノ監督はそんな「上海モダン」と呼ばれた時代を、『危険な関係』の舞台に置き換えたわけだ。

さらに、1937年7月7日の「盧溝橋事件」を契機として同年8月13日から始まる「第二次上海事変」によって全面的な日中戦争に突入していくわけだが、この際、そのような歴史的・政治的・軍事的視点は横に置き、そんな時代なればこそ成立した、何ともスキャンダラスな不倫・恋愛ゲームをたっぷりと楽しみたい。



『危険な関係』

配給：キノフィルムズ

2014年1月10日(金)、TOHO シネマズ シャンテ、新宿武蔵野館ほか全国ロードショー

©2012 Zorbo Media

## ■□ 『スキャンダル』に見るプレイボーイとの対比は？ ■□

ラクロ原作の『危険な関係』が次々と映画化されてきたことは、本作のパンフレットで詳しく書かれている。私が映画ではじめて『危険な関係』を観たのは、韓国のイ・ジョエンが監督し、原作のヴァルモン子爵に相当するプレイボーイ役に『冬のソナタ』で大ブレイクしたヨン様ことペ・ヨンジュンを起用した『スキャンダル』（03年）。これは、それまでの「洋モノ」と違い、「この韓国で、時代を18世紀の李王朝後期としたのは、両班と呼ばれる特権貴族階級による強固な身分制度と、儒教の考えが根強く残る中での極端な男

尊女卑の思想の時代設定によって、より強烈に不倫とスキャンダルを浮かび上がらせる狙い」だった（『シネマルーム4』193頁参照）。

しかして、同じ韓国のホ・ジノ監督による本作では、プレイボーイ役に同じ韓国人俳優を起用したが、その俳優はナヨナヨとした（？）イメージのペ・ヨンジュンとは正反対で男臭さいっぱいチャン・ドンゴン。もっとも、『ブラザーフッド』（04年）（『シネマルーム4』207頁参照）や『マイウェイ 12,000キロの真実』（11年）（『シネマルーム28』86頁参照）での演技を見る限り、チャン・ドンゴンは人生を精一杯に生きている男は似合うものの、ヴァルモン子爵のようなプレイボーイ役は似合わないのでは・・・？ そんな予想もあったが、『風と共に去りぬ』（39年）でクラーク・ゲーブルが演じた、レット・バトラーばりに口ひげを蓄え、髪をオールバックに整えたチャン・ドンゴン演じる伊達男シエ・イーファンは、1931年の上海にピッタリのプレイボーイに仕上がっている。

まずは、映画冒頭にみる、女2人の鉢合わせに対する手際よい処理ぶりから、そのプレイボーイぶりをしっかり観察したい。

## ■□■嵌める女と嵌められる女はだれが？2人の女優に注目！■□■

『危険な関係』の原作における主要人物は、プレイボーイのヴァルモン子爵の他、ヴァルモン子爵と何ともスキャンダラスかつ公序良俗に反する賭けをするミステリアスな女性メルトイユ公爵夫人と、賭けの対象としてヴァルモン子爵からあの手この手の誘惑を受ける貞淑な女性ツールベル法院長夫人だが、さてこの嵌める女嵌められる女2人の



『危険な関係』 配給：キノフィルムズ e2012 Zorbo Media  
2014年1月10日(金)、TOHO シネマズ シャンテ、新宿武蔵野館ほか全国ロードショー

女性のキャスティングは？それは、『スキャンダル』では、イ・ミスクと木村佳乃に似たチョン・ドヨンだったが、本作ではセシリア・チャンとチャン・ツイイー。

私の大好きな『忘れえぬ想い』（03年）は、『PROMISE』のつまらなさを感じていただけに、この映画でのセシリア・チャンの体当たり演技のすばらしさに酔いしれ、涙、涙また涙という状態になってしまった（『シネマルーム17』191頁参照）ほどの映画だったが、それから10年後、セシリア・チャンは本作でどんな妖艶なモー・ジユ役を？

他方、最近のチャン・ツイイーは、『グランド・マスター』（13年）でカッコいい役を演じていた（『シネマルーム30』246頁参照）が、本作のドゥ・フェンユ役は難しい。つまり、本作のドゥ・フェンユ役には『初恋のきた道』（00年）（『シネマルーム5』194頁参照）当時のような初々しさも必要だし、いったんイーファンと結ばれた後は性愛

の悦びにうちふるえる女というセクシーなイメージも必要だ。さあ、そんな難役をチャン・ツイイーはいかなる演技で？

## ■□■次々と公序良俗違反の契約が！■□■

本作のモーは、電機業界の大物実業家ジン氏からの婚約を解消されたことの腹いせに、友人のイーファンに対して、処女の大好きなジン氏が新たに婚約したジュウ夫人（ロン・ロン）の16歳の娘ペイペイ（キャンディ・ワン）の処女を奪ってくれ、と持ちかける悪女。これが公序良俗に反する契約であるうえ、場合によれば強姦の正犯と教唆犯になる危険すらある謀議であることは明らかだ。そんな公序良俗に反する契約が成立しなかったのは、イーファンが善人だったからではなく、むしろ逆に、イーファンにとってそんな簡単な賭けは面白くないと思ったためだ。なるほど、なるほど……。

そこで成立するその次の公序良俗に反する契約（賭け）は、イーファンの祖母ドゥ・ルイシュエ夫人（リサ・ルー）の別荘に来ているイーファンの遠い親戚にあたる女性フェンユーをイーファンが落とすことができるかどうかというものだ。みんなから尊敬されていた教師の夫を亡くしたため、若くして未亡人になったフェンユーは「地上の天女」ともてはやされているほどお固いらしい。しかし、それこそがプレイボーイの征服欲の原動力になることは古今東西の常識だ。また、こんな契約（賭け）には当然報酬契約も不可欠だが、そこで交わされた、イーファンが勝ったらモーはイーファンのものになり、モーが勝ったらイーファンは河口の土地をモーに差し上げるという報酬契約もまた、公序良俗に反するものだ。

したがって、こんな映画は法的地見地からみると当然「如何なもの？」となるが、男と女の不倫・恋愛ゲームの見地からは興味津々。弁護士の私が言うべきことではないかもしれないが、契約当事者のイーファンとモーが納得しているのだから、それはそれでいいのでは……。

## ■□■やっぱり、「押さば引け、引かば押せ」の方が……■□■

世の中には恋愛小説はゴマンとあるから、それを読めば、恋のテクニックは多種多様であることが理解できる。しかし、見え透いた嘘でもシャーシャーと口にしたたり、見え透いたお芝居でも堂々と演じることができなければ、その道の「大家」になれないことは明らかだ。その点、さてイーファンは……？

本作前半のイーファンの行動を見ていると、あえて部屋の電灯が切れていることを偽装し、それを修理してやることによって感謝してもらおう等のインチキ・テクニックが目立つが、それでも少しずつフェンユーとの距離を縮めていったから大したもの。しかし、「名うでのプレイボーイ」との噂が高いイーファンを、お固いフェンユーがことのほか警戒したのは当然だから、いくら「愛しているのは君だけだ」と告白しても、「それは、どの女性にも言っていることでしょう」と反論されれば、それでジ・エンド。また、いくらラブレター作戦を全面展開しても、あるいは、「夫を亡くした過去に閉じこもってはダメだ。その美しさを夫の手から解放しなければ」と声を大に叫んでみても、そりゃ無駄というもの……。

そう思いながら観ていたが、フェンユーの反応を見ていると、あれあれ、少しずつ変化が・・・。

そして、「決め手」はやはり押すだけではなく、「押さば引け、引かば押せ」のテクニク。全身全霊をかけて恋愛ゲームにのめり込んでいくイーファンの姿はある意味で滑稽だが、こんな恋愛ゲームはやっぱりゾクゾクするほど面白い・・・？

## ■□■意外な展開その1 契約は守られるべきもの？■□■

『スキヤンダル』で木村佳乃似の女優チョン・ドヨンが遂に「落とされてしまう」シーンと、本作でチャン・ツイイー演じるフェンユーが遂に「落とされてしまう」シーンは、男たるものは是非見比べるべきで、それぞれに味わいがある。もっとも、そこまでは恋愛ゲームにおける「口説きのテクニク」を楽しみながらも結論はほぼ見えているが、『スキヤンダル』も本作も、面白いのはそこからの意外な展開だ。

意外な展開の第1は、ちゃんと目的を達成したイーファンが、モーに対してそれを報告し、報酬を求めようとしたのに、モーがすんなりそれに応じず、一方的に契約条件を変更すること。中国人との契約ではこの手の契約の変更はよくあるらしい(?)が、イーファンからの報告を聞いたモーが、今度は「フェンユーを棄てることができたなら、あなたの勝ちと認めましょう」と一方的に条件を変えたのは明らかに不当。

したがって、イーファンもそう反論すればいいのだが、人のいい(?)イーファンは単純にそれを了解し、契約条件を変更してしまったから、次の興味はイーファンがフェンユーをいかにして棄てるかに移っていく。しかし、考えてみれば、これは極めて簡単。現に今や、「イーファンの餃子を作ったり、イーファンの髭を剃ったり、そんなことで毎日過ごせたら、私は満足」と豹変してしまったフェンユーに対し、イーファンはきっぱりと別れの宣言をしてしまったから、これにて物語はジ・エンドに・・・？

## ■□■意外な展開その2 やっぱり男は単純・・・？■□■



『危険な関係』

2014年1月10日(金)  
TOHO シネマズ シャンテ、新宿武蔵野館ほか全国ロードショー  
配給：キノフィルムズ

©2012 Zanbo Media

『風と共に去りぬ』は3時間42分の長編だから、途中インターミッションが入っているが、後半に入ってからスカーレット・オハラにぞっこんになってしまったレット・バトラーのさまざまな苦悩が描かれる。スカーレット・オハラとの間に生まれた愛娘にポニーを買ってやったのに、そのポニーのおかげで愛娘が命を失ってしまうとは・・・。そんな展開の中、次第にレット・バトラーとスカーレット・オハラの仲も険悪になっていくが、そのストーリーを見ていると、やっぱり女

は強くたくましいのに対し、男は弱く単純だということがわかる。しかして本作では、いったんモノにしたフェンユーをいとも簡単に棄ててしまったことを自信満々にモーに報告したイーファンの変貌ぶりは・・・？

近時の男女関係の揉め事には「ストーカー規制法」が適用されるケースが多いが、今や自分のやっていることがよくわからなくなってしまったらしいイーファンが、酒に酔った勢いでモーの寝室にまで入り込んだのは如何なもの？さらに、そこで不覚にも口にしたのは、モーではなくフェンユーの名前だったから、プライドの高いモーが怒りに震えたのは当然。そこでモーがイーファンへの報復として選んだ手段は、これまた公序良俗に反する他、殺人教唆罪にも該当するものだが、その展開はあなた自身の目でじっくりと。

『スキャンダル』の評論でも、私は『遊び人』の結末は、不幸なものとして『相場』が決まっている。そうでなければ、真面目に生きている人とのバランスがとれないことになるから、神サマはお見通しなのだ……。その『相場』どおり、チョ・ウォンの結末は悲惨。そして、チョ夫人も……。？しかし、チョン・ヒョンは……。？』と書いた（『シネマルーム4』197頁参照）が、さて本作に見る『遊び人』イーファンの結末は？中国映画では、『初恋のきた道』でもチャン・ツイイー演ずるチャオ・ディの恋する男性は『教師』だったが、本作でもチャン・ツイイーの亡夫は教師。そして『初恋のきた道』のラストでは、教師が教室で子供たちに語る力強い朗読が印象的だったが、本作のラストでフェンユーが見せる教師の姿も印象的だ。こんなラストを見ると、やっぱり男は単純！そして女は力強く、たくましい生き物という実感が湧きあがってくるが……。

## ■□■日本版『危険な関係』を再度待望！キャストینگは？■□■

私は中国版『危険な関係』の本作が、韓国人俳優チャン・ドンゴンと2人の中国美人女優のセシリア・チャンとチャン・ツイイーのタッグで完成したことに大いに興奮し、喜んでい。そこで待たれるのが、日本版『危険な関係』の製作だ。

『スキャンダル』の評論でも、私は「日本人も不倫モノは大好き（？）だから、江戸時代のカッコイイ、身分いやしからぬプレイボーイ（？）の上級武士を主役とし、ご家老の奥方と結婚前に夫に急死された貞淑な人妻という組み合わせの日本ヴァージョンを企画すれば大ヒットするのでは……。？」と書き、さらに「坂とプロデューサーの発想では、さしずめプレイボーイ役は石田純一（島田紳助も意外に面白いかな？）、奥方役は十朱幸代、または浅野ゆう子、加賀まりこ、大竹しのぶあたり、そして貞淑な人妻役は黒木瞳または松嶋奈々子、沢口靖子、菅野美穂あたりか……。？」と書いた（『シネマルーム4』193頁参照）。その気持ちは今も全く同じだが、これは04年6月2日の執筆当時のベストのキャストینگ。したがって、それから10年を経た今、私が考えるベストのキャストینگは、プレイボーイ役の本命は何と言っても『半沢直樹』で大ブレイクした堺雅人、大穴は同じく『半沢直樹』でオカマの金融庁検査局主任検察官・黒崎駿一役を演じた片岡愛之助だ。他方、奥方役の本命は、今や演技派として大成長した宮沢りえ、貞淑な人妻役の本命は宮崎あおいがベストと思っているが、さて、あなたのご意見は？

2014（平成26）年1月18日記